MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．７．７　発行元
第 373 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

朝永理人「観覧車は謎を乗せて」

この頃の『このミステリーがすごい！』大賞関連の作家の中に「本格謎解き」の要素を持つ作家が何人か現れている。本作もそのひとつ。５月に出たばかりの宝島社文庫・朝永理人『観覧車は謎を乗せて』。

ゲームの設定を思わせる…

読み始めてすぐに思ったことは「ゲーム設定みたいな作りだな」ということ。登場人物を決め、それぞれの背景を背負わせてから、ストーリーの中に嵌め込んでいく。「この次はこう」という計画が作られていることが端々に窺える。そんな雰囲気を漂わせる作品。

水禰自然公園の中にある観覧車。３６個あるゴンドラの中に６組の客が乗っている。Ａ～Ｆの記号が与えられ、読者が混乱しないようにそれぞれの章に横から見た位置取りの図が示されている。

6組の話の組み合わせ

６組の乗客は、それぞれに今日観覧車に乗るべき事情を抱えている。ライフル銃、爆弾…。６つの話は別個に進む。他のゴンドラとどこかで結びつきがあるのかと思って読み進めたが、途中までは完全に独自に進む話。短く切ってカットバックするのが特徴。短い時はほんの数行で別のゴンドラの話に転換する。その意味では、集中的に一気読みした方がわかりやすいかもしれない。厚くない本だし…。

観覧車は途中で停止するのだが、その止まった時のゴンドラの位置が大きなポイントになる。最後まで読むと、いろんな細かな伏線が仕掛けられていることに気付く。「謎解き」というよりは、作者が設定した「隠されているもの」にどう接近していくかだと思う。

爆弾の話が一番の山か？

幽霊が出てきて過去の密室風の「どうやって抜け出したのか」という謎もあるが、一番の盛り上がりは爆弾絡みのゴンドラか。観覧車の回転するスピードと時間の分析が非常に細かい。まあ、実際にはもう少し誤差はあるような気がするけれども。観覧車の精度がどの程度なのかは私には判断できない。

デビュー二作目としては上出来の作品だと思う。ただどうしても「傑作」と言うほどまでには届かない。それは、中レベルの６つの短編を読まされた感じに止まるからだ。どこかに長編としての深まりがあれば…と思う。

朝永理人という作家

作者の朝永理人という作家。デビュー作の『幽霊たちの不在証明』で『このミステリーがすごい！』大賞優秀賞を受賞した。私は未読。フーダニットのパズラーと評されているようだ。スタートしたばかりでまだ未知数の部分が多いが、本格ものに挑戦しようとする意気込みは十分に感じられる。アイディアはとても良かった。次作は更に工夫を練ってくるのではないだろうか。

リチャード・スターク『悪党パーカー/殺人遊園地』

「観覧車」と来たので「遊園地」を取り上げてみようと思っただけ。ハヤカワ・ポケットミステリ１２７６番。こちらは強盗もののハードボイルド。まるで中身は異なる。パーカーは銀行の装甲車を襲って現金を奪ったが、逃走の途中で事故にあってしまう。計画を変更して人のいない遊園地に逃げ込む。それを見ていた街のギャングが横取りをしようと行動を開始する。その様子を察知したパーカーは、遊園地の中の遊具に迎え撃つための仕掛けを設置する。この、「遊園地」という設定と「強盗」という組み合わせが本作を興味深いものに仕上げている。

鯨統一郎『徳川埋蔵金はここにある』

前号の第３７２号で「鯨統一郎の代表作」を取り上げたばかりだが、新作を紹介しておこうと思って本書を読んだ。昨年１０月に双葉社から出た本。『歴史はバーで作られる』シリーズの第二作になる。とは言え、バーのような場所に何人かが集まり、歴史談義を繰り広げるパターンは鯨ミステリでは一番基本になっている形で、別シリーズで同じような展開があっても何の不思議もない。まあ、このシリーズは喜多川猛教授と学生の安田学がバー〈シベール〉を訪ねると、バーテンダーのミサキさんが迎える形になっている。本書ではプラスして村木春蔵という老人が加わる。

今回のテーマは４つ。「竜とドラゴンの起源」「応仁の乱」「天草四郎」「徳川埋蔵金」である。いずれも発想の面白さを展開する話で、それほど科学的な根拠があるわけではない。「応仁の乱」の問題にしても解釈をどう取るかという話であって、全くの新説が登場するわけではない。表題作の『徳川埋蔵金はここにある』は、そもそも埋蔵金は存在するのか、そして隠されているのなら場所はどこかという問題を取り扱っており、紙面上でできる議論。実際にその場所を発掘するような話にはならないのは当然である。